都市と美術に見るコーカサス諸国の現在

河村　彩
（KAWAMURA Aya）

ロシアの南、トルコの北に位置するアルメニア、ジョージア、アゼルバイジャンのコーカサス地方の国々は、政治的にも文化的にも近隣諸国と深く結びつきながら、紛争の絶えない複雑な歴史を辿ってきた。かつてソヴィエト連邦を構成したこれらの国々は、ソ連崩壊からウクライナ戦争中の現代に至るまで、とりわけロシアの政治状況に大きな影響を受けている。芸術や建築に目を向ければ、これらの国々は古い伝統と豊かな山岳諸民族の文化を持ち、ソヴィエト時代に近代的な芸術文化を開花させた。

歴史的建造物や美術作品に向けられる眼差しや、過去の芸術文化に対する評価は、現在の社会状況に少なからず規定される。その国の過去を示す美術館や歴史博物館の展示は現在の政治的状況を反映し、オリンピックや万博などの文化交流の場でアピールされる各国の芸術文化は、その国がどのような未来の展望を描いているのかを提示する。

2024年夏にエレバン、トビリシ、バクーを訪れる機会を得た筆者は、それぞれの街の歴史博物館や美術館、新旧の貴重な建築物や、ソヴィエト時代のモニュメントなどを見て回った。そこで気づかされたのは、自分はソヴィエト時代の美術を研究対象としているにもかかわらず、ロシアを基準とした芸術史観に強くとらわれているということだった。ロシア・ソヴィエトの美術史は、20世紀初頭に興隆した実験的なアヴァンギャルドが、全体主義の1930年代に入ると抑圧され、理想的な労働者の生活や指導者の姿を写実的に描写する社会主義リアリズムが公式の芸術様式とされたというナラティヴによって語られる。だがコーカサス地方

そして中央アジアの旧ソ連の国々は、公的な様式である社会主義リアリズムを受容しながらも、独自の地方色や民族的伝統を導入した芸術を発展させた。これらの国々はいわばオルタナティヴな近現代美術史を形成していたのである。

ここでは、コーカサス地方の都市に滞在し、国立博物館や美術館、新旧の建造物やソ連時代の建築を訪れた筆者の経験をもとに、ウクライナ戦争を発端とした揺れ動く現代の社会情勢のもと、アルメニア、ジョージア、アゼルバイジャンの三つの国が、それぞれどのような美術の歴史を持ち、過去の文化遺産に対して現在どのような態度を示しているのか考えてみたい。

*

アルメニアの首都エレバンの中心部には、地域の石材を用いた桃色がかった色味の建築物が立ち並ぶ。1924年、建築家アレクサンドル・タマニャンの都市計画に基づいて建設されたエレバンは、環状道路の内側に碁盤の目状の道路が走り、さらに共和国広場と国立劇場をつなぐ歩行者用道路が南北に設置されている。噴水のある公園や大きな街路樹が至る所にあり、人々はベンチで、犬や猫は木陰で休んでいる。夜には共和国広場周辺の噴水や建物がライトアップされ、週末になると夏の宵を楽しむ家族づれで夜遅くまで賑わう。首都の中心部は安全で整備が行き届き、極めて居心地が良い。

そのエレバンの名所となっているのが、革命50周年を記念して計画されたカスカードである【図1】。これは、街の中心部と高台の地域をつなぐエレベーターおよび階段で、階段の途中の5層になったテラスの各階には、噴水やソヴィエト時代に設置されたさまざまな美術作品が置かれ、都市景観にアクセントをもたらしている。海外の作品も多く、太った人物像で有名なコロンビアのフェルナンド・ボテロの彫刻も階段下の公園に設置されている。

カスカードは街を挟んでアララト山の反対側に位置し、空気の澄んでいる日は山をのぞむことができる。アルメニアはローマに先立って世界

【図1】カスカード

で最初にキリスト教を受け入れた国であり、アララト山は旧約聖書で語られるノアの方舟がたどり着いた場所とされている。アララト山はアルメニアの人々の宗教的・精神的な支柱にもかかわらず、現在はトルコ領となっており、カスカードはそのようなアララト山をつぶさに眺めることのできる位置に建築されている。カスカードは宗教を否定した社会主義ソヴィエトの建築遺産でありながら、アルメニアの人々の密められた宗教心を充す役割も果たしているように思えた。

カスカードの階段を延長した上方には、アルメニア・ソヴィエト共和国成立50周年の記念碑が設置されているのだが、驚いたことに、カスカードの頂上では途中で階段が途切れて鉄柵が建てられ、立ち入り禁止の廃墟になっている。これは、ソ連邦が崩壊し、続いてナゴルノ・カラバフ紛争が勃発したため、1980年代末にカスカードの建設が放棄され、そのままになっているためである。完成させる計画もあるようだが、今のところ石やコンクリが乱雑に放置された穴の中には、ゴミが投げ入れられるままになっている。カスカードの姿は、まるで完成されることの

ないまま崩壊した共産主義そのもののようである。そのようなカスカードを背景にして、手前の公園では夏の音楽フェスティバルの準備が着々と進行中であった。

絵画の分野でアルメニアの国民的画家とされているのが、マルティロス・サリヤンである。サリヤンはソヴィエト時代に活躍し、息子も音楽家として名声を博した。街の中心部にはサリヤン一家の住居を活用した美術館が建設されている。1880年生まれのサリヤンはモスクワの有名な美術学校、絵画建築彫刻学校で絵画を学んだ。同年代の画家と同じく、世紀転換期に興隆した芸術の潮流に乗って「芸術世界」や「金羊毛」などの新興芸術家グループの展覧会に出品し、マティスやゴーギャンら後期印象派の影響を強く受けた絵画を制作した。彼は長期間にわたってペルシア、トルコ、エジプトなどを旅行し、フォービズムを思わせる簡素化されたフォルムと大胆な色彩で各地の風景や風俗を描いた【図2】。

第一次世界大戦中にオスマン・トルコによるアルメニア人の虐殺が生じると、サリヤンはエレバンに戻り、逃亡者たちを援助する仕事に携わる。1917年のロシア革命後、短期間の独立を経てアルメニアに社会主義政権が成立すると、サリヤンは芸術家協会や考古学博物館、美術学校の設立に尽力する。1920年代には数年間パリで過ごすものの、1928年に帰国するとアルメニアの風景を描くようになる。また、かなりの数のアルメニア社会主義共和国の指導者や文化人のポートレートを手掛け、劇場の幕や舞台美術も手がけている。社会主義リアリズムの興隆する1930年代には一時期形式主義として批判されるものの、1940年代以降はソ連芸術アカデミーのメンバーや、アルメニア芸術家協会代表を務めるなど、アルメニアを代表する芸術家として名声を獲得した。

サリヤンはアルメニアを拠点としていたがゆえに、ソヴィエトおよび西洋の美術史の中では異端の位置を占めている。ゴーギャンやマティスがアフリカやタヒチといった異国の地に向けたオリエンタリズムとも言える眼差しを、サリヤンはアルメニアという自分の出身地に向けている。この視点によってサリヤンは自国アルメニアの固有性を発見し、国

【図2】サリヤン《アラガツ山》1925年

民的な画家にまで上り詰めたのである。サリヤンの絵画が持つオリエンタリズムは、西洋人の見方で捉えた東洋ではなく、むしろ西洋的な見方を身につけた非西洋人による自国の周縁的な文化の再解釈である。

また、モスクワやサンクトペテルブルクといった中心部で活動した同世代のアヴァンギャルドの画家たちの多くが、最終的にはソヴィエトを捨て、ヨーロッパやアメリカに渡ったのとは異なり、サリヤンはソヴィエト国内で成功した。1920年代に入ると、ロシアでは新しい社会主義の生活に役立つデザインを標榜する構成主義が興隆し、絵画そのものを放棄することが主張された。デザインに転向することを拒み、油彩を描き続けることを選択したアヴァンギャルドの画家たちの多くは、フランスやドイツへと移住し、そのままソヴィエトに戻ることはなかった。サリ

ヤンが展覧会に出品した「芸術世界」グループの芸術家たちや、彼よりも1年年下でサリヤンに似たネオ・プリミティヴィズムの傾向を持つナタリヤ・ゴンチャローワも、最終的にフランスに活動の場を見出した。だが、サリヤンの場合はソ連邦の周縁であるエレバンを拠点としていたために絵画制作を続けることが可能であり、アルメニアを代表する画家となったのである。

ヨーロッパでは、オペラやバレエのシーズンは秋から始まり、夏はオフシーズンであるが、幸い滞在期間中の9月初旬に、アルメニア国立劇場でアラム・ハチャトゥリヤンのバレエ「ガイネ」を見ることができた。1942年に初演されたこのバレエは、元はソヴィエト時代に作られたアルメニアの集団農場コルホーズを舞台にしたものである。主人公のガイネが、怠け者で密輸を犯す夫の犯罪を暴き、国境警備隊の男性と結ばれるというストーリーとなっていた。富農の父を告発した少年パヴリク・モロゾフが模範少年とされていたように、当時は身内や個人的な利益を犠牲にしてでも社会的正義を守る主人公が小説や映画の中にはしばしば登場した。ガイネも明らかにこのタイプのヒロインに属するのだが、現在ではガイネと相思相愛の恋人、そして彼女に横恋慕して悪事を働く男性の単純な三角関係のストーリーとなっている。

このバレエは最後の宴で山岳民族が披露するダンス音楽「剣の舞」が突出して有名だが、個性的なリズムを持つ楽曲は全幕を通してどれも魅力に溢れている。コーカサス地方の山岳民族は、歌唱とダンスを伴った独自の音楽文化を持つことで知られている。また、ソヴィエトは「形式においては民族的、内容においては社会主義的」（ただしここでの「民族的」という表現には「ナロード」つまり普通の民衆にもわかりやすいという意味も含まれている）のスローガンのもとに、連邦内の共和国や民族の独自の文化を尊重する政策をとっていた。赤、青、オレンジの国旗の色が衣装や舞台装置に多用された今回の「ガイネ」は、ソヴィエト時代の政策の産物をアップデートし、現代的なナショナリズムの美学を提示しているように感じられた。

ところで、当然のことながら、歴史博物館の展示はその国が自国の歴史をどのように捉えているかを反映する。これはその国の美術史を示すことになる美術館の常設展示も例外ではない。アルメニア国立歴史博物館が充実しているのは、石器時代、青銅器時代といった古代部門と、キリスト教を受容し、教会や修道院、ハチュカルと呼ばれる石彫の十字架が誕生した中世の部門である。今回訪問した際には、ロシア帝国領となった19世紀とソ連時代の20世紀の展示室は閉鎖されていた。

また、歴史博物館と建物を共有するアルメニア国立美術館では常設展は設置されておらず、訪問時にはイヴァン・アイヴァゾフスキーの特別展が開かれていた。アイヴァゾフスキーは、民族的にはアルメニアにルーツを持つものの、1817年クリミア半島に生まれてペテルブルクのアカデミーに進学した。海洋風景を描いた画家として、ロシアおよび旧ソ連諸国では今でも根強い人気がある。さまざまな地域を旅したアイヴァゾフスキーはコーカサス地方を訪れてはいるものの、海のないアルメニアを題材にした絵画はそう多くはない。

ソ連邦からの独立後、アルメニアは、ナゴルノ・カラバフ地域を巡ってアゼルバイジャンと紛争になった。1994年にはアルメニアが勝利したが、2020年に再び紛争が勃発し、この時にはトルコの支援を受けたアゼルバイジャンが勝利した。停戦を仲介したロシアとアルメニアは軍事同盟を結んでおり、元々ロシアとの関係は悪いわけではない。だがウクライナ戦争開始後2年以上経ってからロシア主導の軍事同盟からの脱退を表明し、2025年1月にEU加盟の希望を示すなど、その立場は揺れている。

古代のキリスト教遺産を充実させる一方で、20世紀の展示が不在の歴史博物館と、近代美術の常設展を持たない国立美術館は、ロシアと一体だった帝政期からソ連時代の歴史に対する見方と、近い未来のヴィジョンを決めかねているアルメニアの現在を表しているようにも思える。空港からホテルへと送ってくれたタクシーの運転手が、アルメニアの古い教会を見るのを楽しみにしていると言った私に対して、アルメニアには

古い歴史はあるけれど、それしかないんだよ、と答えたのが印象的だった。

＊

かつてはロシア語でグルジアと呼ばれていたジョージアは美食と健康に良いとされるミネラルウォーターの産地であり、ソヴィエト時代から温暖な気候のために保養地としても人気があった。そのような土地の利を生かして、現在はインバウンド招致に熱心である。ヨーロッパからの観光客が多く、また物価が安く長期滞在が可能なため、日本でもノマドワーカーの移住先としてしばしば取り上げられる。

ジョージアはＥＵへの加盟を目指しており、省庁や博物館などの公共施設ではジョージアの国旗とＥＵの旗がしばしば並んで掲げられているのを目にする。2024年10月の総選挙ではロシアに協力的な与党が勝利したものの、人々の反露感情は根強く、選挙不正を訴えるデモが絶えない。トビリシの街ではあちこちの建物の壁にジョージア国旗と並んでウクライナ国旗が描かれ、プーチンやロシアを批判する落書きがやたらと目につく。ウクライナ戦争後、ジョージアには戦禍から逃れてきたウクライナ人や、現在のロシアの体制を嫌がり、徴兵を逃れるために移住したロシア人たちが急増しているという。反ロシア、親EUの雰囲気の強いジョージアの首都トビリシは、ここ数年でロシア周辺諸国の移民もヨーロッパの観光客も受け入れる国際都市の一つとなった。

観光客が多いせいか、ホテルやカフェではごく当たり前のように英語で話しかけられるものの、一定の年齢より上の世代の人々はロシア語が堪能である。そのような人々はロシア語が通じることがわかると急に表情を柔らかくし、有益な情報を親切に教えてくれたり、日本や私自身のことをあれこれ尋ねたりと、雑談が盛り上がったことが幾度もあった。いくらロシアが嫌いでも、ジョージアの人々にとってロシア語は身体と感情に結びついた言語であり、英語は観光客向けのサービス用の言語でしかないことを実感させられた。

トビリシでは官公庁や劇場の立ち並ぶルスタヴェリ通りがメインストリートの役割を果たし、そこから一本入ると急な勾配の旧市街となる。

【図3】トビリシ旧市街の住居

旧市街の建物の多くは19世紀に建てられたと思われるヨーロッパ風の2、3階建てのビルで、そこに中東やコーカサス地方によくみられる木造のバルコニーが付されている【図3】。だが、これらの旧市街の建物は、とにかく古い。外壁が剥がれ落ち、窓枠のペンキがはげ、エントランスのアール・ヌーボー様式の格子は歪み、床のタイルは剥がれて三分の一ほどしか残っていない。3階は半ば倒壊して崩れ落ちているのに、2階では人が暮らしている建物もあった。

陋屋となった歴史的建築物に住み続けるのは、トビリシの人々に限ったことではない。私が留学していた2000年代初頭、サンクトペテルブルクの中心部の住居の荒廃ぶりに最初は恐れおののいたものだった。中心部の建築物の多くは帝政時代に建てられたものであるが、立て替えはおろか、メンテナンスも全くなされず、共用部分の玄関ホールや階段は荒れるがままになっていた。階段の壁は落書きだらけ、ゴミが捨てられ、ペットの排泄物の匂いがした。そんな荒れた階段ホールを登って個人の住居の二重扉を開くと、美しく整えられた居心地の良い別世界が広がっ

ていた。ロシア人は内と外を区別し、態度が全く違うとしばしば言われるが、それは住環境に関しても例外ではなかった。教養豊かなロシア人の歴史の先生は、荒廃した階段ホールはロシア人の公共性の欠如をあらわしており恥ずかしく思う、と言っていた。トビリシの歴史地区の建築物は、私が留学していた頃からさらに20年分の古さが増し、荒廃が進んだような状態だった。

だがトビリシでは、このような古い建築物の一部が無理やり改装されて、観光客にジョージアの名産品であるワインを提供する洒落たバーになっていたり、派手で個性の強い服を売る「ビンテージ・ショップ」になっていたりする。インバウンド相手の商売に利用されることを狙ってか、崩れかけているにもかかわらず堂々と「売り出し中」の張り紙が貼られた廃屋も見かけた。公共性なきかつてのソヴィエト人の恥部も、豊かなヨーロッパの観光客にとっては、ひなびた魅力となるのだろう。

ジョージア国立博物館は3つの建物からなっている。メインの建物では旧石器時代から20世紀までの歴史展示が見られ、そこから数百メートル離れたルスタヴェリ通り沿いの美術館では国民的画家ニコ・ピロスマニの絵画が展示されている。メインの建物裏のビルは改装中だったが、カンディンスキーなど西洋近現代絵画の展示を予定しているようだった。

20世紀の歴史展示は、ソ連のボリシェヴィキによる虐殺と、ジョージアの独立運動の歴史として提示されていた。最初に目に入るのは、ソ連の秘密警察による虐殺の痕跡である。秘密警察が反ボリシェヴィキの活動家を処刑した際の、生々しい銃弾の跡の残る貨車が展示室の一角を占めていた【図4】。この展示室では、ジョージアの20世紀の歴史はロシア帝国の一部であったジョージアが、ロシア革命後の1918年5月26日サカルトヴェロ民主共和国として独立したことから始まる。ちなみにサカルトヴェロはジョージア語での国名であり、ジョージアは長らくロシア語由来のグルジアとして国名を認知されていたが、数年前から英語由来の国名を名乗り始めたのである。サカルトヴェロ民主共和国は18の国

【図4】秘密警察が反ボリシェヴィキ活動家を処刑した際の銃弾の跡の残る貨車

から承認されるものの、9ヶ月後にはボリシェヴィキに占領される。その後は、ジョージアの自由と独立を求める運動や、ボリシェヴィキによるジョージアの聖職者および文化人に対する弾圧の歴史が紹介される。

スターリンの肖像が展示されているものの、彼がジョージア人であったことには全く言及されず、ジョージア出身の革命詩人のマヤコフスキーに関しては黙殺されている。社会主義の思想に共鳴したジョージア出身の知識人や文化人、ボリシェヴィキに協力した者も数えきれないほどいたにもかかわらず、彼らの存在は無視され、ソヴィエト時代はもっぱら否定すべき時代としてのみ語られている。

ルスタヴェリ通りには国立博物館の建物と並んで、ジョージア国立美術館が位置している。曲線的な装飾のある印象的なファサードを持ち、ガラス張りの階段とエレベーターホールを持つモダンな建築物である。ここには、主にソヴィエト時代に活躍した画家の作品が展示されている。一人につき1フロア、あるいは1から3つの壁面があてがわれ、作家ごとに作品が紹介されている。3階に及ぶ広大な展示室いっぱいに作品

が展示されているため、その数はかなり多い。この美術館で気になったのは、キュレーションが機能していないことである。作家の生涯と作品傾向の解説はあるものの、なるべく多く絵画を展示するという方針のために、作品の見どころや各作家の位置付けが全く理解できなかった。

ジョージア国立美術館のキュレーションの機能不全の展示には次のような事情があるのだろう。ジョージアで画家が多く育つようになったのは、美術館や芸術学校が整備されたソ連時代以降である。それ以前はプロフェッショナルな画家は、アルメニアのアイヴァゾフスキーやサリヤンと同じく、モスクワやサンクトペテルブルクで教育を受けていたと推測される。つまり、ジョージアを代表する画家を紹介しようとすれば、それは社会主義時代に教育を受け、公的な社会主義リアリズムのスタイルで描く画家がほとんどということになる。ソヴィエト時代の文化遺産を拒絶するとすれば、当然これらの画家にも否定的な評価を下さなければならないが、そうするとジョージアの良質な美術作品は存在しないことになってしまう。

ジョージア国立美術館の展示には、ソヴィエト時代やロシアに関連づけられるものであれば全てを否定する、現在のジョージアの歴史観がもたらす矛盾と混乱が現れているように感じられた。歴史的位置づけと価値判断が放棄されたまま、観光地の売り絵のように所狭しと並べられた絵画は、ジョージアに押し寄せる外国人たちに価値を見出されるのを待っているのかもしれない。

ジョージアの美術の中で例外的に価値が定まっている芸術家が二人いる。一人は先述したピロスマニである。放浪の画家、ジョージアのルソーとも呼ばれるピロスマニは、独学で学んだ絵画の技法を用いて店の看板絵を描く代わりに食事や宿を提供してもらい、街から街へと移動する生活を送っていたと言われている。

彼を「発見」したのは、ロシア・アヴァンギャルドの画家のイリヤ・ズダネヴィチであった。1912年コーカサス地方を訪れたズダネヴィチは、翌年モスクワで開催された「標的」展で彼の絵画を紹介した。ピロス

【図5】ピロスマニ《赤いシャツを着た漁師》1908年

マニの絵画はミハイル・ラリオーノフやゴンチャローワらの絵画とともに、当時流行していたネオ・プリミティヴィズムの絵画として紹介され、注目される。漁夫、女優、裕福な商人のポートレート、コーカサス地方独特の豪華な宴の様子、鉄道、動物、風景などジョージアの風物を描いたピロスマニの絵画は素朴な魅力に溢れている【図5】。ジョージアの人々であれば身近で懐かしい光景を、外国人であればジョージアのエキゾチックさを、各々が彼の絵画の中に見出して楽しむだろう。

もう一人のジョージアを代表する美術家がズーラブ・ツェレテリである。彼は彫刻家としてジョージアとロシアの両国をまたにかけ、90歳となった現在でも活躍している。メガロマニアックなモニュメントで知られ、キリスト教のモチーフやジョージアの歴史に関するレリーフが施さ

れた30メートルを越える柱が立ち並ぶトビリシのモニュメント《ジョージア年代記》は彼の代表作である。

モスクワ850周年を記念して作られたピョートル大帝像もツェレテリが手がけている。この像はモスクワ川の中洲に設置され、全長98メートルもの大きさがある。帆船に乗る大男ピョートルを表したこの作品は、あまりに巨大で目立ち、異様なまでの存在感を放っているため、モスクワ市民からは醜い、景観破壊であるという批判的な意見もあり、賛否両論にさらされた。

ツェレテリはトビリシ芸術アカデミーのモニュメント装飾部門で教える一方、1997からはロシア芸術アカデミーの学長、2003年からモスクワ現代美術館の館長も務めている。1965年には共産党に入党しており、2003年にはプーチン大統領の勅令により、功績が認められてロシアの市民権を獲得し、ロシアからも数々の国家賞を受賞している。ウクライナ戦争の前兆となった2014年のクリミア占拠の際には、クリミアとウクライナに関するロシアの政策を支持する声明を発表したものの、助手がジョージアのテレビのインタビューに答えて翌日にはこの事実を否定するという事件が起こっている。

ツェレテリはモニュメント彫刻という公共的な性格の強いジャンルに携わり、意図的に政治権力に近い立場を取りながら、ジョージアにおいてもロシアにおいても絶大な権力を手に入れた。筆者がトビリシの現代美術館を訪問した時は、1階の中規模展示室ではジョージアの現代美術家たちによるメディア・アートの特別展が展示され、広大な2階のメインフロアはツェレテリの作品が占めていた。国立美術館のワンフロアが彼の功績を讃えるギャラリーとなっていることからも、ジョージアにおけるツェレテリの影響力がうかがえる。だが反ロシア感情が極めて強いジョージアにおいて、ロシアとジョージアの両方に良い顔を見せるツェレテリを、人々はどのように思っているのか疑問を抱かずにはいられない。実際にはロシアとジョージアの両方で活躍する人々、両方にルーツを持つ人々も少なくはない。穿った見方をすれば、そのような人々にも

ジョージアでは活躍する余地があるということを、トビリシの現代美術館は暗に示しているのかもしれない。

*

コーカサス3カ国の中でもアゼルバイジャンは別格であるという印象を受ける。大きな違いはキリスト教を信奉するアルメニアとジョージアとは異なり、イスラム教の国であることだ。さらに、少なくとも首都のバクーは他の二つの国の首都と比べてもかなり裕福で活気があり、イスラム教諸国からの観光客の姿も多く見られる。カスピ海の海岸近くの通りと街の中心部には19世紀の建物が立ち並び、パリやサンクトペテルブルクを彷彿とさせる。そのような景観に調和する瀟洒なマンションやホテルが建てられ、街は建設ラッシュの様相を呈している。

その一方で、世界遺産の歴史地区には拝火教の寺院やイスラム教のモスクやマドラサ、かつてのシルヴァン・シャー王朝の宮殿があり、木製のバルコニーが付属した石造の伝統的な住居が現在でも残っている。歴史地区の背後には、3棟から成る炎の形をした超近代的なフレイムタワーが姿を表し、夜になるとガラス張りのビルの表面にアゼルバイジャンの国旗が華々しく映し出される【図6】。街の中心部は整備と清掃が行き届き、全ての時代の建物がそれぞれの個性と美点を際立たせている。

このようなバクーの豊かさを支えているのはオイルマネーと独裁に近い大統領一家の政治体制である。先のフレイム・タワーも大統領一家アリエフ家と関係の深い企業グループが所有している。他にもカスピ海沿岸には三日月の形をしたガラス張りのクレセント・モールや、巻かれた絨毯の形状をしたカーペット・ミュージアムなど、建物そのものが街のシンボルとなるような、目を引く近未来的な建築が点在し、ドバイの景観を彷彿とさせる。

だがオイルマネーがもたらすアゼルバイジャンの豊かさは最近のものではない。国立歴史博物館の展示を見てみると、すでに19世紀から石油の採掘とバクーの繁栄が始まっていたことがわかる。帝政期ロシアのエンジニアや起業家のみならず、イギリスの企業やロスチャイルド財閥な

【図6】旧市街とフレイムタワー

ど、ヨーロッパ諸国もアゼルバイジャンの持つ宝に目をつけ、バクーに進出した。

歴史博物館が示すアゼルバイジャンの歴史は、ジョージアの歴史博物館と比べると中立的で妥当であり、理解しやすいものであった。ロシア帝政期およびソヴィエト時代のアゼルバイジャンは、原材料を提供する植民地的な立場にあったという見方を提示してはいるものの、その一方で、ソヴィエト初期は近代的な機械や採掘のノウハウが導入された発展の時代として位置付けられ、それらの技術が紹介されている。

だが、ソ連後期から独立後の展示に関してはもっぱらアリエフ大統領家を賞賛するナラティヴが展開される。ヘイダル・アリエフは1969年からアゼルバイジャン・ソヴィエト社会主義共和国において第一書記を務め、ソ連崩壊後に大統領を二期務めた。展示では、諸外国と石油開発に関する国際条約を結び、トビリシを経由してトルコに至る新たなパイプラインを建設するなど、石油産業をもとにアリエフがアゼルバイジャンをいかに発展させたかが語られる。2003年からは長男のイルハムが父

【図7】旧タギーエフ邸

親のあとをついで大統領を務めているが、博物館の展示では、彼が父親の政策を進めてさらに石油産業を発展させると同時に、アルメニアから迫害を受けていたナゴルノ・カラバフのアゼルバイジャンの人々を解放することに成功したことが強調されている。

この国立歴史博物館の建物は、もともと石油で財を成したザイナラブジン・タギーエフの邸宅を利用したものである。かつての住居の一部が家具調度品とともにそのまま残され公開されているが、これらは目を見張るほど贅沢で美しい【図7】。ヨーロッパ風の豪華な大広間や客室には繊細なイスラム風の装飾が取り入れられ、「冬の庭」と呼ばれる観葉植物が置かれたガラス張りのテラスには、コーカサス地方の建築の特徴が生かされている。篤志家であったタギーエフは学校や病院の設立に尽力し、オペラ・バレエ劇場への支援を惜しまなかったという。彼のような

存在により、アゼルバイジャンは早くも世紀転換期にはロシアやさらに西側のヨーロッパの文化を取り入れ、芸術と生活の近代化を果たしていた。タギーエフとアリエフというそれぞれの時代の巨大なオイルマネーに支えられ、アゼルバイジャンは独自の発展を遂げたのである。

それはアゼルバイジャン国立美術館からも伺える。この美術館は、石油で材を成したオランダ人によって19世紀末に建てられた宮殿と、ロシア皇帝妃の命令で設立された女学校の建物を展示室にしており、二つの建物をモダンなガラス張りの棟が繋いでいる。コレクションは、17世紀以降のヨーロッパの美術作品、ロシア美術、アゼルバイジャンの伝統的な美術作品等から成り、西洋美術の歴史と自国の美術作品が一望できるような、教育的な配慮が行き届いた展示になっている。

アゼルバイジャンにおいても近代的な絵画が盛んになるのはソヴィエト連邦加盟後の1920年代以降である。当然ソヴィエトの公的な芸術様式である社会主義リアリズムの作品が大部分を占めることになるが、アゼルバイジャン国立美術館ではそれぞれの作家の秀作が選んで紹介されているために、社会主義リアリズム絵画が豊かなヴァリエーションを持ち、画家ごとに個性が際立っていることが明確に見て取れる。

政治家のポートレートや政治的に重要な場面、あるいは工場や集団農場での生活といったテーマを多く持つ社会主義リアリズムの絵画は、独創性のない紋切り型の絵画と見做されがちだが、実際には時代によっても作家によっても変化が見られる。たとえば、カスピ海の油田で働く労働者たちを描いたタイル・サラーホフは、スターリン時代のリアリズムとは一線を画し、理想化を廃して現実を描こうとするシビア・スタイルの代表者とされている。アゼルバイジャン国立美術館には、厳格な構図や輪郭、抑えた色彩の絵画などサラーホフの特徴を明確に示す秀作が厳選されて展示されている。また、ワジヤ・サメドワをアゼルバイジャン最初の女性画家として再評価する、現代的な切り口の展示が行われていた【図8】。

旧ソヴィエトの国々に比べても、アゼルバイジャンは美術に関してか

【図8】ワジヤ・サメドワ《クル川の岸辺にて》1961年

なり現代的な視点を持っている。思い出してみれば、2013年のヴェネツィア・ビエンナーレにおいて、アゼルバイジャンは中規模のパラッツォに「オーナメント」というテーマの独自のパヴィリオンを設置しており、その完成度の高さに驚かされた。伝統的なカーペットの柄で覆われた来場者をもてなす応接間のインスタレーションや、結婚式の写真を中心にアゼルバイジャンの女性の人生をテーマにした作品、木材をスクリーンに投影した影絵によってイスラム諸国で広く見られる細密画を浮かび上がらせる作品などが展示され、フランスで活躍するキュレーターのもと、アゼルバイジャンのアーティストが自国の伝統文化を取り入れた現代美術の作品を展開していた。伝統に基づく個性と、現代的な視点、そしてスペクタクルな魅力を兼ね備えたアゼルバイジャンのパヴィリオンは、他国のものと比べても際立っていた。そして、このパヴィリオンは大統領夫人が中心となって文化事業を運営するヘイダル・アリエフ財団がコミッショナーとなっていた。

このようなアゼルバイジャンの現代性、そして豊かさと独裁の象徴が

2012年に開館したヘイダル・アリエフ・センターである。地上から天井へと曲線を描く特徴的な屋根を持つこの建築物は、間違いなく建築家ザハ・ハディドの代表作の一つである。建物を引き立たせるよう周りに平地のスペースが十分に取られ、バクーの街中を車で走っていると忽然と現れるこのセンターは、見る者にかなりのインパクトを与える。建物はホールや会議場、展示スペースなどを持ち、複合的な文化施設となっているが、ヘイダル・アリエフ大統領の功績を記念する常設展示が設置されている。

アゼルバイジャンは2025年の万博開催地を大阪と競い合った。結局大阪がその権利を勝ち取ったものの、ハディドによる競技場計画が東京オリンピックの際に頓挫したことを考えると、アンビルトの女王の建築物を発展のシンボルに掲げている点では、アゼルバイジャンは日本のはるか先を行っている。2025年の大阪万博では、アルメニアが独自パヴィリオンの設置を断念したのに対し、アゼルバイジャンはアーチを備えた個性的なパヴィリオンを計画している。コーカサス地方を含めたロシア周辺の国際情勢が揺れ動く中で、それぞれの国が自国の歴史と展望を今後どのように示すのか見届けたい。

＊この研究ノートに関する調査は科研費（「現代メディア・イベントとしての万国博覧会史：メディア研究とデザイン研究の視座から」24K00036）の支援を得て行った。